

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

ぼくたちは、いつも「何がこわい」という。また、「何もこわくない」という。そこで分かるのは、こわさという感情には、相手になるもの、つまり対象があるということだ。この対象がはっきりしているか、いないかは、とてもたいせつなことだ。

こわいという感情は、人間のたくさんの感情の中でも、とても大きな意味を持っていると、ぼくは前にいったけれど、君はおぼえているだろうか。この感情が、なぜたいせつかという、それは、この感情が、人間が安全に生きてゆくために、どうしても必要な本能に結びついているからだ。その本能は、個体①ホゾンの本能と呼ばれるもので、危険から自分のからだを守り、いのちを守ろうと働く。

こわいものが、はっきりとぼくたちに危険なものであれば、こわいものを避けていけば、ぼくたちは安全に生きられることになる。たとえば、山でクマに会えばこわい。しかし、動物園のおりの中にはいつているクマを見ても、ぼくたちはこわさを感じない。危険とこわさは、この場合、比例している。しかし、ぼくたちがこわがるものは、それではぜんぶ危険なものだといえるだろうか。そうではない。どうして、こんなものをこわがる必要があるだろうと思えるものまで、ぼくたちはこわがることがある。それは、こわさが、ぼくたちの安全を守るための本能に結びついているということと、とても矛盾むじはんしているようにみえる。

危険を避けるためにこわさが必要ならば、こわい相手はつきりしていなければ困る。そうでなければ、どうやって、その危険をのがれるか、見当がつけられないだろう。

ここで、君といっしょに赤んぼうのことを考えてみよう。② 赤んぼうは、こわさを知らない。しかし、赤んぼうのまわりには、たくさんの危険がある。危険があるどころか、おとなが守ってやらなければ、生きてゆけないほど、危険がいっぱいだといえるのだ。ほっておけば、ストープにさわられるかもしれない。刃物はものを出しっぱなしにすれば、それをオモチャにしてけがをするだろう。だから目が離はなせない。赤んぼうは、自分だけでは生きてゆけないのだ。また赤んぼうは逃げられもしないから、こんな赤んぼうが、クマのこわさを知ったところで、どうにもならないだろう。おとなに守ってもらうことだけが、自分が危険からのがれられる、た

だひとつの方法だ。だから、おとながいなくなり、ひとりぼっちになることが、いちばんの、そしてただひとつの危険だということができる。

生まれたばかりの赤んぼうは、ぜんぜんこわさを知らない。それはあたりまえだろう。危険なもの、安全なものどころか、ものそのものの区別さえできないのだから。ものの区別ができないで、危険か危険でないかが、わかるはずがない。しかし、自分では、動くことさえできないのだから、自分で危険のなかにとびこむこともない。

そのうち、赤んぼうは、③ するようになり、それから、よちよち歩きするようになる。それと同時に、危険に出会うことも多くなる。おとなが、いちばん目が離せない、あぶない④ジギだ。また、じつさいにも、目を離れたわずかのあいだに、事故も起こる。まだ、こわがらないからだ。きたないものでも口にいれる。熱いものにもさわるかもしれない。とがったものをつかむことだつてあるだろう。だから、おとなが、そうした危険なものから、赤んぼうを遠ざけておかなければならない。

こんな赤んぼうが、いちばんはじめに見分けるようになるのは、自分のおかあさんだ。おかあさんというよりは、自分を守っていてくれる、いちばんたいせつな人間といったほうがよいだろう。そして、その赤んぼうが、さいしょにこわさを知るようになるのは、このころからのようだ。人みしりをするようになる。知らない人、めがねをかけた人などが、赤んぼうをあやそうとすると、泣きだして、おかあさんにしがみつく。

しかし、この時本当に、赤んぼうがぼくたちの感じているのとおなじようなこわさを感じているのか、それはわからない。赤んぼうは、しゃべってくれないし、そのときのことをおぼえていて、もうすこし大きくなってから説明してくれることもないからだ。しかし、そんなとき、おかあさんに必死にしがみついて泣く赤んぼうを見ると、ぼくにはこわさを感じているように見える。そう見えるだけかもしれない。しかし、もし、それがこわさだとするなら、赤んぼうはおかあさんというお気に入り人間といっしょにいれば安心できるが、そうでなければ危険だということが、つまりこわいということが、わかりかけたことになる。

もうすこし大きくなると、ひとりになることのこわさ、見知らぬ人や場所のこわさが、しだいにはつきりしてきて、はじめて、はつきりと、こわいということを意識するようになる。こわいと口にだしていうようになる。しかし、そこでのこわさはどうだろ

う。対象は、まだぼんやりしている。危険とこわさは、はっきり結びついていない。

ひとりぼっちになること、おかあさんのすがたが見えなくなることは、いちばんこわいことだが、それは、直接の危険ではなくなっている。こどもは暗闇をこわがるが、闇がこわいといつても、闇が直接に危険なのではない。闇の中でも、おかあさんが声をかけてくれたり、手をにぎってくれれば、こわさはなくなる。⑤ウラをかえせば、闇は、おかあさんの顔が見えなくなる、自分たったひとりになると感じるから、こわいのだとも言える。

ここで、⑥どうしてこどものころ、おかあさんやおとうさんがぜったいにえらいと感じているか、君にもわかってきただろう。こどもは、自分のまわりにどんなこわさがあるか知らない。ただ、おかあさんといっしょにいれば、だいじょうぶと思う。おかあさんが、どんな危険からも自分を守ってくれると思わなければ、絶対だと思わなければ、安心できないだろう。じつさいには、大きくなくていくにつれて、おかあさんなんてたよりにならないなあ、と思うようになる時がくる。しかし、そう思うようになったら、いくらおかあさんにいっしょにいてもらったって安心できない。安心するためには、おかあさんが絶対だ思うしかないのだ。

小学校に行くぐらまでの年齢のこどもは、おとうさんやおかあさんをたよりにしている。それを依存というのだが、四歳ぐらまでの時は、ぜったいに依存している。⑦ジョウタイだ。そのころは、おとうさんやおかあさんが、絶対だと思う。まるで、神様とかわりなくらいに、ぜったいにたよっていられると感じるのだろう。

その年齢のこどもは、それでも全体からすると、こわいものを知らない。だから、おとなは、こどものあそんでいるのを見ると、ハラハラのしどおしだ。たとえば、家にネコがいると、耳をつかんだり、しっぽをつかんで、ギョツとひっぱたりする。そんなことをしたらネコに爪でひつかかれたり、かみつかれたりするかもしれない。こどもはそんな危険を、はじめは知らないのだ。高いところのぼって落ちることの危険、毒なものを食べるこわさ、刃物にさわって、けがをするこわさ、そうしたことを、小さいこどもは知らない。

そして、大きくなるにつれて、そうしたこわさを、ひとつひとつ知るようになっていく。どうしてこわいか、どんな場合にこわいかを知るようになる。こわさと、危険とが、だんだん近づいてきて、重なりあうようになる。それを知るとは、自分ひとり

で、おかあさんにたよらずに、自分で自分のからだを、いのちを、守っていくようになることだ。つまり、依存症いぞんしょうが、少なくともっていくことだ。

こどもは、<sup>⑧</sup>そうしたことを、ひとつひとつ学んでこわさをもっと正確につかんでおとなになっていく。そして、自分というものを持つようになる。たとえば、だれかにたよっていないなければ、安心できないときは、何がこわいかわからないけれども、ぼくぜんとこわい。対象がわからないこわさだ。それが、はじめに、ものに対するこわさになる。ネコにひっかかれると、ネコがこわくなる。

しかし、もっと大きくなれば、ネコにひっかかれることがこわくなる。つまり、ことがらに対するこわさが問題になる。ネコがこわければ、ネコが目の前にいれば、それだけでこわいだろう。しかし、どんなことをすればネコが爪でひっかくのかを知れば、ネコそのものはこわくなくなる。こんなことをすれば、こんな目に会うというこわさだ。それは目の前に起こっていないが、起こるかもしれないものに対するこわさだ。

こうして、こわさの相手は、しだいに数はふえていくが、同時にこれはこわくない、こんな場合はこわくない、安心していいということながらも、ふえていく。そうしたものを、そうしたことを、こわがり、警戒けいかいしていれば、安心していいわけだ。

<sup>⑨</sup>その区別がはつきりしていく。たとえば、山でクマに出会うとこわいが、動物園のおりのクマはこわくない。それと同じように、ぼくたちのところは、ぼくぜんとこわがった対象を、こういう場合、ああいう場合という、目に見えないおりの中にいれてしまうようなものである。そのこわさをおりにとじこめるものが、ぼくたちの知識や<sup>⑩</sup>ケイケンだ。

ママシもほかのへビも、区別のつかないものは、へビというへビをこわがるのが当然だ。ぜんぶこわがれば、ママシもよけられるだろう。しかし、君が、ママシに毒があるが、ほかの日本のへビには毒がないことを知れば、他のへビを区別し、へビ全体をこわがる必要はない。そして、ママシのどこをおさえれば、ぜったいにだいじょうぶだということを知りようになれば、ママシにかまれることのこわさを充分に知っていても、見ただけでふるえることはなくなるだろう。

『心の底をのぞいたら』なだいなだ

問一 — 部①・④・⑤・⑦・⑩のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 — 部②「赤んぼうは、こわさを知らない」とありますが、なぜですか。解答らんに合うように、文中から十五字でぬき出しなさい。(句読点は字数に入れません。)

問三 — 部③に当てはまるくり返す二字の言葉を、ひらがな四字で答えなさい。

(例) 頭をなでなでする。

問四 — 部⑥「どうしてこどものころ、おかあさんやおとうさんがぜったいにえらいと感じているか、君にもわかってきたらう」とありますが、そのように感じる理由を四十五字以内で説明しなさい。(句読点は字数に入れません。)

問五 — 部⑧「そうしたことを、ひとつひとつ学んでこわさをもっと正確につかんでおとなになっていく」とありますが、どういうことですか。文中の言葉を使って八十字以内で説明しなさい。(句読点は字数に入れません。)

問六 — 部⑨「その区別がはっきりしていく」とありますが、その区別がはっきりできる人の意見として、最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア こわいものは世の中にたくさんあるので、気にしなければいいんだよ。

イ こわいと不安になったら、まずはそこから離れてしまえばいいんだよ。

ウ こわいと思ったら、できるだけすぐにだれかに助けてもらえばいいんだよ。

エ こわいものなんて、とにかく強い気持ちを持たばなんてことはないよ。

オ こわいと思うものを、まずはしっかりと知ることが大切なんだよ。

問七 「こわい」という言葉を国語辞典の『広辞苑』で調べると、次の説明がのっている。

(1) おそろしい。悪い結果が予想され、近寄りたくない。

(2) 人知(人の知恵)でははかりがたい、すぐれた力がある。驚くべきである。

この(1)・(2)に共通する意味を、本文の内容をふまえて説明しなさい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

〈小学校六年生の安齋と僕(加賀)が通う学校に、プロ野球選手(打点王氏)がやって来た。その日は雨で、選手によるお話だけになったが、残念がる子供たちを見た選手の気づかいで、翌日晴れば野球教室が開かれることになった。そこで安齋と僕は、話を終えて学校から帰ろうとしている選手を追いかけ、あるお願いをしていた。〉

野球教室の日は晴れた。「日ごろの行いが良かったから」と校長先生は①テンケイ的な言い回しを口にし、「どうして大人はよくそう言いたがるのかな」と疑問に感じたが、とにかく前日とは打って変わり、快晴だった。

午前中の二時間、希望する子供はバットを持ち、校庭に出て、選手の指示通りに素振りの練習をした。

担任教師のいく人かは腕に覚えがあるのか、子供たちにまじりバットを振った。久留米もその一人で、いつも真面目な顔でチョークを使っているだけであるし、体育の授業でも②フエを吹く程度であったから、運動が得意な印象はなかったのだが、学生時代は野球部で鳴らしていたというのも嘘ではなかったらしく、美しい姿勢で素振りを披露した。

「久留米先生、かつこいい」と女子から声が上がリ、僕と安齋は顔を見合わせ、なぜかおもしろくない気持ちになった。

安齋も、僕と似たり寄つたりの、情けないスウイングをしていたが、途中で、「加賀、校庭でみんなバットを振っているのは何だか変だよな」と言った。

「新しい体操みたいだ」

「みんなで振り回して、電気でも起こしている感じにも見える」

打点王氏は真面目な人だったのだろう、形式的にふらふらと歩き回り指導のふりをするのではなく、一人一人のフォームを見ては、ひじや膝を触り、丁寧にアドバイスしていた。

僕たちのいるあたりには、一時間もしてからやっとな来た。

打点王氏は、僕と安斎に気づくと顔を少しひくつかせた。前日、タクシーに乗りこんできた二人だと分かったのだ。「昨日はどうも」と挨拶する様子で、笑みも浮かべた。「どれ、振ってごらん」と声をかけてくる。

僕は、うん、とうなずき、バットを構えたが、「うん、じゃなくて、はい、だろ」と横から指摘された。見れば久留米が立っていた。スポーツウエア姿も様になり、打点王氏の隣に立つと、コーチのように見える。

「はい」僕は慌てて、言い直す。ろくな素振りではできなかったが、打点王氏は笑うこともなく、「もう少し、あごを引いてごらんとアドバイスしてくれた。「体の真ん中に芯があるのを意識して」

はい、と答えてバットを振ると、僕自身は変化が分からぬものの、「うん、そうそう」とほめられる。安斎も、僕と似たような扱いを受けた。

そして、だ。安斎がいよいよ本来の目的に向かい、一歩踏み出す。「久留米先生、草壁のフォーム、どうですか」と投げかけたのだ。

久留米は③フイに言われたため、小さく驚き、同時に、草壁がどうかしたのか、と醒めた表情も浮かべた。草壁がいること自体、忘れていた心配すらあった。

草壁は、僕たちのいる場所から少し離れたところにいたが、打点王氏が近づいていくと緊張のせいなのか、顔を真っ赤にした。「やってごらん」打点王氏が声をかける。

草壁はうなずいた。

「うなずくだけじゃなくて、返事をきちんとしなさい」久留米がすかさず注意をした。

草壁はびくつと背筋を伸ばし、「はい」と声を震わせた。

あたふたしながら、バットを一振りする。僕から見ても不恰好で、バランスが悪かった。腕だけで振っているため、どこか弱々しかった。

「草壁、女子じゃないんだから、何だそのフォームは」久留米の声は大きくはないのだが、低く、あたりによく聞こえる。近くに

いた子供たちが、「草壁、女子みたいだつて」と言い、土田か誰かが、「クサ子」と囃した。④安齋が舌打ちをするのが聞こえた。久留米が意図的に言ったとは思わぬが、確かに、そういった発言により、他の子供たちが、「草壁のことを下位に扱ってもよし」と決めている節はある。

安齋はさすがのような目で、打点王氏を見上げた。「草壁はどうですか？」と、草壁の名前をはっきりと発音し⑤昨日の依頼を想起させるように言った。

打点王氏は眉を少し下げ、口元をゆがめた。このスウィングをほめるのは至難のわざ、と思ったのかもしれない。

「よし、じゃあ草壁、もう一回、やってみなさい」久留米が言ったが、そこで安齋が、「先生、黙ってて」と言い放った。

久留米は、自分に反発するような声を投げかけた安齋に、目をやった。⑥自分に向けられた槍の切っ先の形を、じっと確認するかのようにあった。むっとしていられるかどうか分からない。

「先生がそういうことを言うと、草壁は緊張しちゃうから」安齋の目には力がこもり、声もうら返っていた。

「こんなことで緊張して、どうするんだ。緊張も何も」

「先生」あの時の安齋はよくも臆せず、喋り続けられたものだ。つくづく感心する。「草壁が何をやってもだめみたいな言い方はやめてください」

「安齋、何を言ってるんだ」

「子供たち全員に期待してください、とは思わないですけど、だめだと決めつけられるのはきついです」

安齋は、ここが勝負の場だと覚悟を決めていたのかもしれない。立ち向かうと⑦を決めたのが分かり、僕は気が気でなかった。

打点王氏のほうはといえば、大らかなのか鈍感なのか、安齋と久留米との間で起きる火花を気にかけることもなく、草壁のそばに歩み寄ると、「もう一回振ってみようか」と言った。

はい、と草壁はあごを引くと、すつと構えた。先ほどよりは強張りがなく、脚の開き方も良かった。



⑧先入観を、と僕は念じていた。そのバットで吹き飛ばしてほしい、と。

もちろん草壁が、プロ顔負けの美しいスウィングを披露し、その場にいる誰もがあつげに取られ、いちやく学校の人気者になる、といった⑨ゲキテキな出来事が起こると期待していたわけではなかった。むろん、そのようなことは起きなかった。草壁の一振りには、先ほどの腰砕けのものに比べればはるかに良くなっていたが、目をみはるほどではなかった。

安齋を見ると、彼はまた、打点王氏を見上げていた。

腕を組んでいた打点王氏は、草壁を見つめ、「もう一回やってみよう」と言う。

こくりとうなずいた草壁がまた、バットを回転させる。弱いながらに風の音がした。

「君は、野球が好きなの？」打点王氏がたずねると、草壁はまた首だけで答えかけたが、すぐに「はい」と言葉を足した。

「よく練習するのかな」

「テレビの試合を観て、部屋の中だけど、時々」とぼそぼそと言った。「ちゃんとは、やったことありません」

「そうか」打点王氏はそこで、少し考える間を空けた。体をひねり、安齋と僕に一瞥をくれ、久留米とも視線を合わせた。その後で、草壁のひじや肩の位置を修正した。

草壁が素振りをする。

ずいぶん良くなったのは、僕にも分かる。同時に、打点王氏が、「いいぞ！」と大きな、透明の風船でも破裂させるような、威勢の良い声を出した。まわりの子供たちからの注目が集まる。

「中学に行ったら、野球部に入ったらいいよ」打点王氏は言い、そして、僕たちが望んでいたあの言葉を口にした。「君には素質があるよ」と。

⑩自分の周囲の景色が急に明るくなった。安齋もそうだったにちがいない。白く輝き、腹の中から光が放射される。報われた、という思いだったのか、達成した、という思いだったのか、血液が指の先にまでたどり着く、充足感があつた。

草壁は目を丸くし、まばたきを何度もやった。「本当ですか」

久留米がどういふ顔をしていたのか、僕は見逃みのがしていた。もしかすると、見てはいたのかもしれないが、今となっては覚えていない。

「プロの選手になれますか」草壁の顔面は朱しゆに染まっていたが、それは恥はずかしさよりも、気持ちの高まりのためだったはずだ。久留米の立つ方向から、鼻で笑う声が聞こえたのもその時だ。何か、草壁をたしなめる台詞せりふを発したかもしれない。

「先生、草壁には野球の素質があるかもしれないよ。もちろん、ないかもしれないし。ただ、決めつけるのはやめてください」

「安斎はどうして、そんなにムキになっているんだ」久留米が冷静に、淡々たんたんといなす。

「でも草壁君、野球ちゃんとやってみたらいいかもよ」佐久間さくまがいつの間にか、僕たちの背後に立っていた。「ほら、プロに太鼓判たいこばん押されたんだから」

草壁は首を力強く縦に振った。

恐る恐る目を向けると、打点王氏は僕の予想に反して、明るい顔をしていた。あれは、<sup>⑩</sup>乗りかかった船、の気持ちだったのだろうか。それとも、先生と安斎とのやり取りから、嘘をつき通すべきだと判断したのか、そうでなければ、草壁の隠かくれた能力を実際に見抜みぬいたのか、いやもしかすると、豪放磊落しょうほうらいらくの大打者はあまり深いことは考えていなかったのかもしれない。彼は、草壁に向かい、「そうだね。努力すれば、きつといい選手になる」と付け足した。

久留米はそこでも落ち着きはらっていた。「何だかそんな風に、持ち上げてもらってありがたいです」と打点王氏に頭を下げた。

「草壁、おまえ、本気にするんじゃないぞ」とも言った。「あくまでもお世辞だからな」

念押しする口調がおかしかったからか、数人が笑った。場が和なごんだといえは、和んだが、わざわざそんなことを言わなくとも、と僕は<sup>⑪</sup>シヨウフクできぬ思いをいだいた。

「先生、でも」草壁が言ったのはそこで、だ。「僕は」

「何だ、草壁」

「先生、僕は」草壁はゆつくりと、「僕は、そうは、思いません」と言い切った。

安齋の表情がくしゃつとゆがみ、笑顔になるのが目に入るが、すぐに見えなくなった。なぜなら、僕も目を閉じるほど顔をゆがめ、笑っていたからだ。

『逆ソクラテス』伊坂幸太郎

注 豪放磊落・・・明るく元気で、小さなことにこだわらないさま。

問一 — 部①・②・③・⑨・⑫のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 — 部④「安齋が舌打ちをするのが聞こえた」とありますが、なぜ安齋は舌打ちしたのですか。三十五字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問三 — 部⑤「昨日の依頼」とありますが、安齋と僕は打点王氏にどのようなことを依頼したと考えられますか。「依頼」の内容を十五字程度で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問四 — 部⑥「自分に向けられた槍の切っ先の形」とは、だれの、だれに対するどのような気持ちを表していますか。二十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問五 — 部⑦に当てはまる体の部位を漢字一字で書きなさい。

問六 — 部⑧「先入観」とは、どのような「先入観」ですか。解答らんに合うように、文中から十字程度でぬき出しなさい。(句読点は字数に入れます。)

問七 — 部⑩「自分の周囲の景色が急に明るくなった」とありますが、このときの僕の気持ちとして最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 打点王氏が威勢の良い声を出し、まわりの子供たちの注目を草壁に集めたことに胸をはずませる気持ち。

イ 打点王氏がみんなの前で草壁をほめ、草壁のもつ可能性を認めてくれたことに満足する気持ち。

ウ 打点王氏が野球教室に来てくれて、光り輝くような日ざしのなか野球ができることを幸せに思う気持ち。

エ 打点王氏が子供たち全員に期待をし、一人一人丁寧にアドバイスをしてくれたことを喜ぶ気持ち。  
オ 打点王氏の指導によって、草壁が美しいスウィングができるようになったことに感動する気持ち。

問八 — 部⑪「乗りかかった船、の気持ち」とは、どのような気持ちのことですか。「乗りかかった船」の意味をもとに、三十五字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問九 文中において、久留米先生はどのような人物として描かれていますか。久留米先生の人物像を説明した文として当てはまらないものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生徒一人一人を丁寧にみる、真面目で生徒思いの人物。

イ 大人に対して子供が失礼な態度を取ることを嫌う人物。

ウ 野球部出身で美しい素振りができる、運動神経の良い人物。

エ 先入観だけで生徒を判断し、決めつけるところがある人物。

オ 低い声がよく通る、一言一言に影響力がある人物。

問十 この文章の始めと終わりでは、周りの人に対する草壁の様子はどのように変化していますか。本文の内容に基づき、変化のきっかけもあわせて、五十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)